疾走する帝都

東京大学大学院工学系研究科建築学専攻教授 伊藤 毅（いとう たけし）

2007年3月

去る3月上旬、わずか2日間だけだが、およそ2年ぶりに北京を訪れた。目的はオリンピック直前の北京の姿をみるためである。2004年のアテネオリンピック開催前夜の8月にたまたまアテネを訪れる機会があったので、2回連続オリンピックを直前にひかえた2都市をみる幸運に恵まれたのである。

当時アテネは空港と市内を直結するリニアモーターカーの建設がまだ進んでおらず、主要なオリンピック施設も郊外に建てられていたので、あまりオリンピック目前の緊張感は感じられず、町のなかはのんびりした日常生活が展開していた。ギリシャの象徴であるパルテノン神殿だけは、オリンピックに向けて石を積み直すなどの修復整備が行われていたが、それもごく日常の一コマに過ぎなかった。

一方の北京は明らかに建設活動の沸点に達していた。アジアでの開催は1988年の韓国ソウルオリンピック以来20年ぶり、中国での開催は史上初であることから、その意気込みに拍車がかかるのは当然といえる。北京を21世紀の帝都に仕上げるべく、中国は国家の威信をかけて、オリンピックを迎える準備に余念がない。そして北京は2年前よりずっと洗練された都市に生まれ変わっていた。若者のおしゃれなデートスポットとしてにぎわう后海エリアはまるで東京の六本木・青山・原宿を髣髴させるものであったし、路上に溢れていた自転車は徐々に姿を消し、海外製の自家用車が町を席巻しようとしていた。

数奇な運命

中国5000年の歴史のなかで、北京が首都となったのは、それほど古いことではない。中国の歴代国家、秦・漢・隋・唐は首都を長安や洛陽などの別の都市においており、北京は華北の有力都市の一つに過ぎなかった。北京がはじめて国都となったのは、モンゴルの元王朝3代目皇帝フビライが1267年に大都と名づけた時からである。

次いで明にかわって、1644年満州族の清が北京を占領し、北京は2度目の国都になる。しかし19世紀に入るとアヘン戦争などで欧米列強が介入し、1850年の太平天国の乱を経て、清王朝はその実体を失い衰微する。そして1912年、孫文が指導する辛亥革命によって輝かしい王朝時代の幕が閉じられることになる。

辛亥革命によって成立した中華民国は、当初国都を南京に定めたが、それは北京には旧来の勢力が強く、ここに拠点をおくことが困難であったからである。孫文の後を継いだ蒋介石は、北京を含む華北地方の旧勢力を順次打倒し全国を統一しようとするが、満州や華北へは日本軍の進出が激しくなり、毛沢東が指導する中国共産党も次第に力を強めていた。日本が第二次世界大戦に敗戦し無条件降伏すると、今度は国民党と中国共産党との間での全面戦争となり、蒋介石率いる国民党は、これに敗北して台湾に逃れ、1949年10月、中国共産党の毛沢東が北京の大安門（現、天安門）で建国宣言を行い、中華人民共和国が成立する。北京が三たび首都に返り咲いた瞬間であった。

都城から現代都市へ

北京はこのように歴史に翻弄されながら数奇な運命を辿ったわけだが、その都市構造には、不変不動のものがある。それは中国古代都市＝都城としての構造であって、天安門広場を中心として、東・西長安街とその延長線を横軸に、故宮へと向かう中心軸を縦

写真-1 国中央電視台

軸とする十字型の道路パターンである。これは中国最初の整った都城である長安にもっとも典型的にみられたもので、天子である中国皇帝が地上に構築した一大人工環境に宇宙の秩序を射影する中心軸であった。この構造は今日に至るまで継承され、南北を貫く中心軸沿いには、天壇や前門の箭楼、故宮、景山、北海、鼓楼・鐘楼が分布していて、北京でもっとも重要な歴史文化遺産が集積している。一方の東西軸は現在マスタープランにもとづいた開発整備が進行中で、国家施設など重要なモニュメントと緑地がたちならぶ、威厳ある都市景観が形成されつつある。そして2軸の交点となる天安門広場はますますその求心性を高めている。北京は激動の歴史を生きながらも、帝都としてのプライドを失っていない。

かつて北京を取り囲んでいた城壁は、文化大革命以降取り払われ、近代化を目指して中国初の環状地下鉄が通された。さらに地上には広幅員の環状道路が敷設される。この環状道路は次々と同心円状に広がっていき、現在6つ目の環状である六環路が建設中で、2008年には完成する運びとなっている。将来、七環路ができると天津まで北京に呑み込まれてしまうという冗談もあながち笑い話ですまされないような勢いである。

西二環路の復興門から阜成門までの一帯は金融の一大中心地で、20行以上の大銀行の本社ビルが相次いで建設されている。西単と王府井は近年の大規模な再開発を経て、国際レベルの商業中心地として繁栄を謳歌している。

東三環路の両側と大使館区を取り囲むエリアには、オフィスビルが林立する1000万平方メートル以上の中央業務地区（CBD、Center of Business District）が生まれようとしている。ここにはオランダ人建築家レム・コールハース氏設計によるCCTV（国中央電視台）の建設が現在急ピッチで進められており、壁面が斜めに立ち上がる異形の相貌をもたげつつある（写真-1）。

亜運村（アジア村）一帯にも高級なオフィス、超高層マンションが次々と完成し、これらが現代都市北京屈指のブランド地区となっている。

東三環中路の建国門外大街には山本理顕氏のマスタープランによる建外SOHOの高層ビル群が林立し、一種異様な風景を醸し出している。メタリックな外装と透明な立体グリッドによって生まれたこのSOHO地区は、

写真3 SOHO尚都

アジアにありながらその文脈を一挙に超越して国際社会と直結するような無機質・無国籍な空間で、その当否はともかくとして、北京の現代都市としての側面をもっとも率直かつ直截に表現しているようにみえる(写真-2)。

建外SOHOを仕掛けた会社は大手ディベロッパーの紅石社。現在、社名をSOHO中国と変更し、CBD地区を中心に大規模な開発を次々と進めている。近年竣工したばかりのオーストラリア人建築家ピーター・デヴィッドソン氏設計によるSOHO尚都(写真-3)もこの会社によるもので、SOHO(Small Office, Home Office)という業務形態を中国に最初に持ち込んだ張本人である。不動産市場がまだ未成熟であった90年代後半から不動産開発に取り組み、いまや中国ディベロッパーの最右翼と目されている。北京の大規模な再開発はこうした民間ディベロッパーに主導権が握られているが、国家はこうした民間活力を巧みに利用・コントロールしつつ、1500万人都市北京の国際化に向けて疾走しているかのようだ。

写真-2 建外SOHO

2008年8月

北京市域の活発な建設活動と軌を一にして、北京オリンピック関連の施設や交通網も着実に整えられている。いくつか建設中の施設を紹介しよう。

2008年北京オリンピックの中心施設となる北京オリンピック公園は、コンペの結果、米国SASAKIAアソシエーツと天津華匯工程建築設計有限公司が共同設計した案に決定した(図-1)。公園には選手村を含む、

図-1 北京オリンピック村

オリンピックの大部分の施設が建設されることになる。オリンピック公園は北京の南北軸上にあり、この軸線をさらに北側に延伸すべく、北京北部のまだ都市集積

写真-5 国家遊泳中心

の少ない地区に緑地・オープンスペースをともなって2008年に誕生する運びである。

オリンピック公園の中心施設であり、オリンピックのメインスタジアムとなる国家体育場は、ロンドンの工場を再生したテートミュージアムや、東京のプラダ・ブティック青山店の斬新な設計で知られるスイス人建築家のユニット、ヘルツォーク&ド・ムーロン氏の設計案による(写真-4)。鉄骨をアクロバティックに組み上げた独創的な造形が現出しようとしている。形態はまるで「鳥の巣」のようで、Bird's Nestと愛称されている。外観の特異さと一転して、内部はきわめてオーソドックスなスタジアムが誕生することになっている。

国家体育場の向かい側に建設中の国家遊泳中心は、矩形の単純な形態であるが、外被が巨大なフッ素樹脂の水泡群によって覆われている(「水立方(water cube)」が愛称)。ブルーの六角形状の水泡から透けてみえる室内側内壁には斜のテンション材がはりめぐらされ、大架構の室内空間がまもなく生まれることになる(写真-5)。設計はオーストラリアのPTWアーキテクツ。

国家大劇院はフランス建築家ポール・アンドリュー氏の設計。パリ空港公団のチーフアーキテクトであり、世

写真-4 国家体育場

以上のオリンピック施設を含む国家施設はいかにも過剰な造形であり、北京にはふさわしくないというのが大方の感想であろう。実際、北京市民の評判もかんばしくないようである。しかし中国はこれらの施設設計を世界的な建築家が真剣に競う国際コンペとして演出し、そのうえ各プロジェクトに中国人建築家ないし設計組織をジョイントさせている。世界最先端の建築デザインや構造技術を学び、やがては世界的な中国人建築家を育てるまたとないチャンスととらえていることは明らかで、こうした施設が未来永劫北京に存続することは考えていないのではないかと勘ぐりたくなる。

界各国の空港を多く手がけてきた。チタニウムを使った巨大な卵形の造形は北京中心部の環境から大きく逸脱しているといわざるをえない(写真-6)。しかし国際コンペによって選ばれたこの案には、将来の中国政府の文化政策への強い意思が込められているようにもみえる。外被のシェルとはいったん縁を切ったかたちで、オペラ劇場と2つの小劇場が入れ子状に内包される予定である。

北京の「図」と「地」

近年の中国マネーを背景とした主要都市の発展はすさまじい。社会主義国でありながら、グローバルキャピタリズムとも適合的な都市発展の姿を中国はつくろうとしている。従来、社会主義国といえば、国土は国家に帰属し、厳正な計画経済によって民間は完全な国家統制下にあることが常識であった。しかし中国は

写真-6 国家大劇院

写真-7　798 北京大山子芸術村

不動産の使用権（現在最長70年）をまるで資本主義下の私有権のごとく読み替えることによって、不動産市場を急速に成熟させ、民間の開発意欲と海外からの投資の誘導に成功した。現在都市開発の主役を担っている民間ディベロッパーはいずれもここ10年の間に急成長した企業ばかりである。

その一方で、人民政府はこれらをコントロールすることも忘れていない。土地がすべて国家に帰属するということは、最終的な判断は依然として国家に担保されていることを意味し、オリンピックなどの国家的イベントには国家が民間活力や海外企業を巧みに利用しつつ主導権を握ることができる。

北京の地上に林立する超高層のビル群はまるで砂上の楼閣のようにみえるかもしれないが、実はこうしたビル群の地下には必ず国防上の防空壕設置が義務づけられており、華やかな「図」の展開の一方で、「地」の部分には着実に国益になるインフラが整備されているのである。

スクラップ・アンド・ビルドだけでなく、たとえば北京市街地北東の「798 北京大山子芸術村」の事例をみると、西欧型の保存再生プロジェクトに著しく接近した文化度の高い保存再生が実現している。ここはかつて「798工場」と呼ばれ、電子部品などを生産していたが、工場はやがて使われなくなり、空き家になった工場を巧みに利用して、現代アートのメッカとして生まれ変わった（写真-7）。北京はこの手のプロジェクトにも積極的に取り組んでおり、開発の一方で、残すべきものはきちんと残すという姿勢が堅持されている。こうした硬軟両面での都市化の姿をみるにつけ、中国5000年の歴史の厚みと懐の深さを感じざるをえない。疾走しつつも地に足がついているということだ。北京の目指す都市イデアはけっしてマンハッタンを代表とするアメリカ型都市という単純なモデルではなさそうである。

しかし都市における華々しい開発と新たな資本家が輩出される一方で、農村を離れ都市に流入する大量の貧民が分厚く層を形成しつつあることも確かだ。貧富の差は拡大する一方で、都市に滞留する貧民層の動向が今後の北京に深刻な課題として浮上することは大いに予想される。また長期にわたる大量建設がもたらす環境負荷も無視できないだろう。やがてこうした問題に直面し、バブルがはじけて抜き差しならない事態になった時、北京ははじめて西欧や日本がかつて経験した成熟都市に通底する難題を共有することになるだろう。しかしこんなことは中国のエリート指導層にとっては、すでに折り込み済みのテーマかもしれないが…。